第166回 長崎大学FD実施報告書(平成30年3月9日提出)

1. 題 目: 教学マネジメントに基づいたシラバス改訂とその作成要領について

2. 日 時: 平成30年3月6日(火) 10:30~12:00

3. 場 所: 第5会議室(教育学部2階)

4. 主 催:教務委員会

企画・実施: 評価・FD 教育改善専門部会

- 5. 対 象:全教職員(非常勤を含む)
- 6. 長崎大学FDに関する申合せ第2第1項への該当について【複数選択可】 (該当するものに○を記入すること)
 - [](1) 教員の教育活動に関するもの
 - [](2) カリキュラムの改善に関するもの
 - [](3) 教育の組織的改善に関するもの
 - [](4) 入学者選抜方法の改善に関するもの
 - 「) (5) その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの
- 7. 今回のFDの趣旨・意義(6. に関連した形で記述すること)

H28 年度に全学および各学部において3ポリシー(ディプロマ・ポリシー,カリキュラム・ポリシー,アドミッション・ポリシー)の整備を行いました。この整備に伴い,シラバスシステムの改修およびシラバス記載項目についての変更があります。これまで、シラバス作成においては,授業の到達目標,授業方法(授業の形式,事前・事後の学習内容),アクティブ・ラーニングレベル,成績評価の方法・基準等を明示する必要がありました。本FDでは,本学の新しい教学マネジメントの考え方および新たに整理された項目に関し,大学教育イノベーションセンターの教員から情報提供するとともにシラバス作成の支援を行います。

8. プログラム構成 [題目・担当講師] (当日使用した資料等を添付すること)

【題目】

- ① 本学の教学マネジメントに関する確認
- ② 新シラバスの変更点

- ③ シラバスの作成要領
- ④ 質疑応答ほか

【講師】

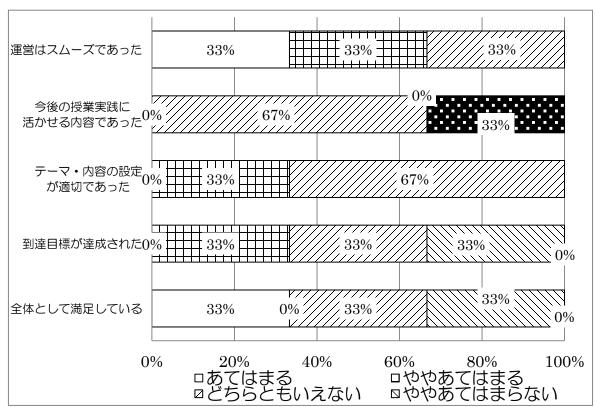
大学教育イノベーションセンター 前田 裕介 助教

9. 参加者: 3名

(内訳)

| 所 属 | 人 数 |
|-----------------|-----|
| 大学教育イノベーションセンター | 2 |
| 事務職員 | 1 |
| 計 | 3 |

- ※ 別紙に参加者名簿を添付してください。
- 10. 実施したFDの成果等
- (1) 参加者からの評価



- Ⅱ. 今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。
 - ・「教学マネジメントに基づいたシラバス改訂」とありましたが、前半の教学マネジメントの話と後半のシラバスの記入方法の話の間に繋がりがある、ということが認識しづら

かったです。おそらく「作成のポイント 6/7」の部分が DP と各授業の繋がりの部分を説明しているとは思われますが、この中に各学部の DP との関連性についての説明がありませんでした。各科目の到達目標はまずは学部の DP と密接に関係があると思われ、その学部の DP が全学 DP に結びつく、と考えると、各科目は本来は学部 DP との整合を気にすればよいだけではないかと思いました。また、7 つのうち 3 つの項目を選択させる根拠もよくわかりませんでした。

やらなくてはならないことは理解はできたと思いますが、「なぜこのような変更が行われることになったのか」「変更に対応することで学生・教員・大学にとってどのようなメリット(もしくはデメリットが解消される)があるのか」については、納得できるまで理解できたとは言えないように思います。

- ・参加者がもう少し多ければよかった。実施時期と内容のマッチングが課題のように思う。
- ・今回のプログラムについて、通常の業務について、なぜ、といったような、事の始まりの部分をなかなか具体的に勉強できる機会がなかったため、とても助かりました。 また、内容もとても分かりやすく説明していただいたため、非常に勉強になりました。

Ⅲ. 長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

- ・大学の設置基準について教員が理解し、「解釈」するようなワークショップ
- ・長崎大学の今現在の運営方針及び組織活動について理解できるFD、あるいは教職員 及び事務の業務内容についてのFDを、新任の教職員及び事務職員を対象に実施でき ますと、お互いに共通の認識が持てるのではと思います。

(2) 総 括

取り扱ったテーマが開催時期に合致していなかったためか、参加者が少なく、結果として担当講師と参加者が同じ部局の者だけでの実施となった。開催時期と取り扱うテーマについては、今後、丁寧な調整が必要となる。

実施の成果については、理解の深まりには結びつかず、プログラムの目的を達成したとは言い難い。ただし、参加者からのフィードバックにも表現されている通り、理解が深まらないことの要因のひとつに、シラバス様式の変更の理由が納得のいく形で説明されなかったことがあるという課題が明確になった。このような苛立ちや理解の不一致は、一層丁寧な説明をすることで解消していかなければならない。

(文責:北村史(大学教育イノベーションセンター))

11. 実施代表者の連絡先

教務委員会委員長 塚元 和弘

e-mail: ktsuka@nagasaki-u.ac.jp

電 話: 内線 2003

12. 申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班

主査 寺川 美穂

e-mail: fd@ml.nagasaki-u.ac.jp

電 話: 内線 2077

第166回 長崎大学FD実施報告書(平成30年3月11日提出)

- 1. 題 目: 反転授業の授業設計と教材動画作成
- 2. 日 時: 平成30年3月7日(水)10時30分~12時00分
- 3. 場 所: A-12 教室(環境科学部)
- 4. 主 催:教務委員会

企画・実施: 評価・FD 教育改善専門部会

- 5. 対象:全教職員(非常勤を含む)
- 6. 長崎大学FDに関する申合せ第2第1項への該当について【複数選択可】 (該当するものに○を記入すること)
 - [](1) 教員の教育活動に関するもの
 - [](2) カリキュラムの改善に関するもの
 - [](3) 教育の組織的改善に関するもの
 - [](4) 入学者選抜方法の改善に関するもの
 - [](5) その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの
- 7. 今回のFDの趣旨・意義(6. に関連した形で記述すること)

効果的な学修の実現のためには、教員からの知識の伝達と学生自信がその知識を自分のものへと咀嚼し活用する過程で定着させていくことをバランスよく組み込む必要があります。学生に伝えなければならない情報量は膨大であり、限られた授業時間内に伝えきるためにはどうしても情報伝達に時間が割かれてしまうことも事実です。今回は伝達を効果的に実施するための手立てとして、講義のコンテンツ化と反転授業の設計について紹介します。

8. プログラム構成 [題目・担当講師] (当日使用した資料等を添付すること)

【題目】

- ①反転授業設計の意義
- ②教材動画の作成方法
- ③教材動画作成の実践
- ④質疑応答ほか

【講師】

大学教育イノベーションセンター 北村 史 助教

9. 参加者:8名

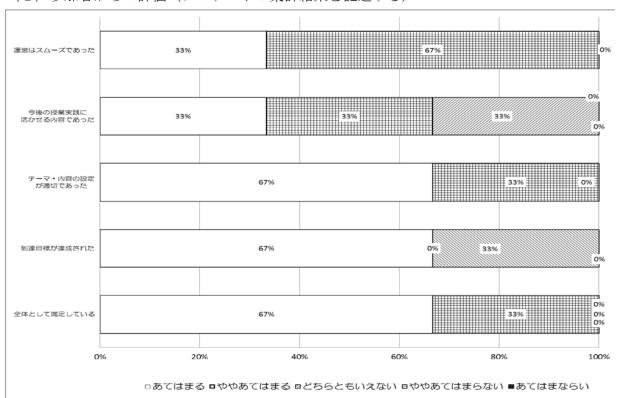
(内訳)

| 所 属 | 人数 |
|---------------------|----|
| 経済学部 | 3 |
| 教育学部 | 1 |
| 歯学部 | 1 |
| 地域教育総合支援センター | 1 |
| 大学教育イノベーション センター | 2 |
| 計 | 8 |

※別紙に参加者名簿を添付してください。

10. 実施したFDの成果等

(1) 参加者からの評価 (アンケートの集計結果を記述する)



- II. 今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。 動画作成に当たって具体的で細かな点まで教えてもらえたのでとても勉強になり ました。
- Ⅲ. 長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。 特になし。

(2)総 括(10(1)を踏まえFD全体の総括を記述する)

本 FD では、「授業で使える動画コンテンツ作成クリニックーiPad 版ー」との題目のもと、iPad を使った動画コンテンツ作成の方法が、実演を交えて具体的かつわかりやすく説明された。大学の講義は、板書を中心としたものから、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを利用したものに次第に移行しつつあるが、ツールが高度化していく中で、動画をはじめとした様々なメディアを講義に活用することは、受講者の労力コストを引き下げるという意味でも、必然的な流れなのであろう。各講義において具体的にどのように動画を利用するかは、まだしばらくは試行錯誤が続くだろうが、いずれにしても見やすく興味を持てるような動画を、できるだけ低コスト・低負担で作成できるようになるかが、利用が進むための鍵になろう。その意味では、本FDでは、関連するツールを比較的容易に利用するためのノウハウが提供されており、講義担当者が動画を作成する際の障壁を引き下げるという点で大変有意義なものであったと思う。実際、自身も自らの講義でこれらツールの活用を検討する契機となった。他の参加者も同様の気持ちをもったのではないかと推察される。

なお、今回提示された基本的な利用方法については、FD に参加できなかった教職員も利用できるよう、広く共有することを検討していただければと思う。また、このようなツールを実際に利用する際に、作成者が直面する問題に、個別にもサポートしていただけるような体制を構築していけば、これらツールの活用がさらに促進されるのではないかと思われる。

(文責: 宍倉 学 経済学部・教授)

11. 実施代表者の連絡先

教務委員会委員長 塚元 和弘

e-mail: ktsuka@nagasaki-u.ac.jp

電 話: 内線 2003

12. 申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班

主査 寺川 美穂

e-mail:fd@ml.nagasaki-u.ac.jp 電話:内線2077

第166回 長崎大学FD実施報告書(平成30年3月15日提出)

1. 題 目: 学生を思考にいざなうレポート課題とは

2. 日 時: 平成30年3月8日(木)10時30分~12時00分

3. 場 所:第5会議室(教育学部2階)

4. 主 催:教務委員会

企画・実施: 評価・FD 教育改善専門部会

5. 対象:全教職員(非常勤を含む)

6. 長崎大学FDに関する申合せ第2第1項への該当について【複数選択可】 (該当するものに○を記入すること)

- [](1) 教員の教育活動に関するもの
- [](2) カリキュラムの改善に関するもの
- [](3) 教育の組織的改善に関するもの
- [](4) 入学者選抜方法の改善に関するもの
- [](5) その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの
- 7. 今回のFDの趣旨・意義(6. に関連した形で記述すること)

レポート課題を課してもコピペが多かったり、あまり学生が頭を使っていないという経験はありませんか?そこでどのようにレポート課題を設計すればよいかについて検討します。

8. プログラム構成 [題目・担当講師] (当日使用した資料等を添付すること) 【内容】

レポート課題について、教員の視点からと、学生の視点からの二つの視点から考えます。教員の視点からは、レポート課題で何を目指すべきかについて考えます。 学生の視点からは、レポート課題が学生からどのように捕らえられているかについて考えます。それらをあわせて、レポート課題をどのように設計すべきかについて議論します。

【到達目標】

- ・レポート課題の問題点について理解する
- ・レポート課題の設計の仕方の多様性について理解する

【講師】

大学教育イノベーションセンター 成瀬 尚志 准教授

9. 参加者:7名

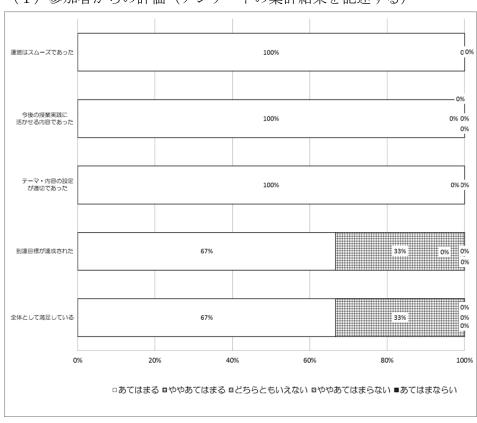
(内訳)

| 所 属 | 人数 |
|-------------|----|
| 言語教育研究センター | 1 |
| 教育学部 | 3 |
| 国際教育リエゾン機構 | 1 |
| 大学教育イノベーション | 2 |
| センター | 2 |
| =- | 7 |

※別紙に参加者名簿を添付してください。

10. 実施したFDの成果等

(1) 参加者からの評価 (アンケートの集計結果を記述する)



Ⅱ. 今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

- ・「形式面での創意工夫」で使用した図は大変興味深かったが、三角形の変化が何を示すのか、もう少し詳しく説明していただけたらよかったと思います。
- ・具体的な事例を上げていただき、集中して学びを深めることができました。授業に活かせる内容でありがたかったです。
- ・普段なんとなく考えては、消えてゆく疑問(これでいいのかな、どうすればいいのかな)をもう一度意識して検討する機会になった。分類し、解説していただいたおかげで、それらの疑問の解決の糸口が見えた。あとは、自分の担当している科目の状況と課題に合わせて、今回得た知見を活かしていきたい。

話題の展開もスムーズで、時間があっという間だった。こう言った研修ならまた受けたい。学生にもそう思ってもらえる講義がしたいものだなぁと新年度の講義への意欲も湧いた。

Ⅲ. 長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

- 学生に読書の習慣をつけさせ、もっと読むように促すために授業を通じて何ができるか。
- ・本日、他の方から話題に上がっていたライティングスキルそのものの育成についても学びを進めてみたい。ただし、これは個人の教員の努力というよりも、大学のカリキュラム・マネジメントにも関わるのだろう。他大学の取り組みなどをいくつか比較して提示してもらえたら勉強になりそう。

(2)総 括(10(1)を踏まえFD全体の総括を記述する)

本 FD は学生が頭を使ってレポートに取り組まないのにはどのような理由があるのかということと、学生が頭を使ってレポートに取り組むための論題の設定にはどのようなものがあるのかについて実例を豊富に混じえながら解説するものであった。レポート課題を出す際には、素材と内容面を創意工夫するだけでなく、形式面での創意工夫を加えることで、学生が剽窃を行わないようになるだけでなく、しっかりと考えながらレポートを作成できることが示された。

当日は参加者から内容に関する質問が多くなされ、議論を深めることができた。また、評価としては満足度についての質問に回答者の全員が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。自由記述でも「疑問の解決の糸口が見えた」「新年度の講義への意欲も湧いた」といった本FDに肯定的な感想が見られた。

(文責:前田裕介)

11. 実施代表者の連絡先

教務委員会委員長 塚元 和弘

e-mail: ktsuka@nagasaki-u.ac.jp

電 話: 内線 2003

12. 申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班

主査 寺川 美穂

e-mail:fd@ml.nagasaki-u.ac.jp 電話:内線2077

第166回 長崎大学FD実施報告書(平成30年4月2日提出)

- 1. 題 目: PROG 受験結果報告会
- 2. 日 時: 平成30年3月15日(木)10時30分~12時00分
- 3. 場 所:第5会議室(教育学部2階)
- 4. 主 催:教務委員会

企画・実施: 評価・FD 教育改善専門部会

- 5. 対象:全教職員(非常勤を含む)
- 6. 長崎大学FDに関する申合せ第2第1項への該当について【複数選択可】 (該当するものに○を記入すること)
 - [](1) 教員の教育活動に関するもの
 - [](2) カリキュラムの改善に関するもの
 - [](3) 教育の組織的改善に関するもの
 - [](4) 入学者選抜方法の改善に関するもの
 - [](5) その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの
- 7. 今回のFDの趣旨・意義(6. に関連した形で記述すること)

本学では、平成 24 年度から初年次生と平成 26 年度から 3 年次生を対象に社会 人基礎力を測定する「基礎力テスト PROG)」を実施しています。このプログラムでは、これまで 4 年間を通して見えてきた本学学生の全体傾向と学部毎の特徴や他大学との比較等を踏まえて、本学学生の汎用的技能(ジェネリックスキル)の状況と 今後の教育課題を検討します。

- 8. プログラム構成 [題目・担当講師] (当日使用した資料等を添付すること) 【内容】
 - ①5年間の「基礎力テスト」の分析結果をもとにした総括
 - ②汎用的技能(ジェネリックスキル)向上のための教育事例の紹介
 - ③自由な意見交換

【到達目標】

PROG テストを通して本学の現状と課題について理解する

【講師】

石川純一(株式会社リアセック)

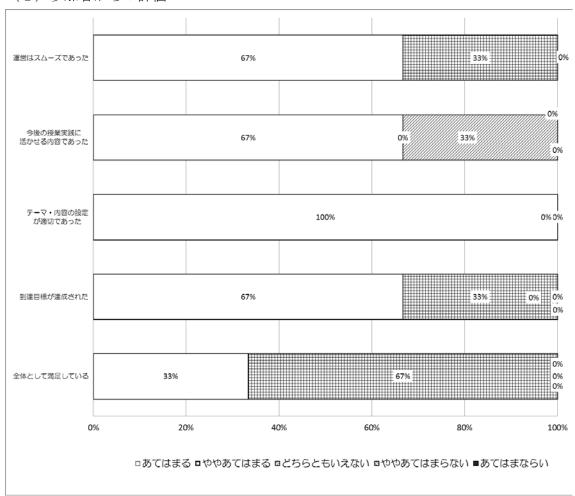
9. 参加者:6名

(内訳)

| 所 属 | 人数 | | |
|-------------|----|--|--|
| 大学教育イノベーション | 4 | | |
| センター | 4 | | |
| ICT 基盤センター | 1 | | |
| 事務職員 | 1 | | |
| 計 | 6 | | |

※別紙に参加者名簿を添付してください。

- 10. 実施したFDの成果等
- (1)参加者からの評価



- Ⅱ. 今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。
 - ・資料の字が小さく読めなかった。
 - ・こちらの質問に対し、満足な回答が得られなかった。

・目標モデルの問題はあるものの、長崎大学の今の教育において上手くいっていそうなところとそうでないところとが確認できたように思います。また、今の PROG によってわかることと、いくつかの試みについても紹介してもらえたことで、教育評価について改めて考えることができました。

(回答者: 3名)

- Ⅲ. 長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。
 - ・今後大学入試で取り扱われる高度な入試についての理解を深めたい。

(2)総 括(10(1)を踏まえFD全体の総括を記述する)

本FDでは、これまで実施してきたPROGテストの結果について、他国立大学との比較や年次による変化などについて詳細な報告が行われた。学部によって結果の傾向に違いがあることがわかったものの、そうした結果をどのように教育改善に反映させることができるかについては検討の余地があると思われる。たとえば、2017年度の3年次は1年次の時と比べて言語処理能力が下がっているが、その結果からどのような対処をすべきだろうか。また、言語処理能力に関してはそれまでの学年では1年次と3年次とを比較した場合、伸びていたため、下がっていたのは本年度の3年次だけの傾向なのかもしれない。しかし、そうした観点から見ると、リテラシーに関してはこの4年間で変化の傾向がまったく変わっていない観点はほとんどない。つまり、このPROGの結果が、本学の教育プログラムによる成果を反映しているものなのか、あるいは、それよりも他に結果にもっと大きく影響を与える要素があるのかなどについても検討する必要がある。

他大学の事例として、ある特定の能力が学年全体として低いことが PROG によって わかったため、その能力を伸ばすことを目指した授業を取り入れたことで、実際にそ の能力が高くなった、という事例が紹介された。具体的にどのような授業を行ったの かということも含め、そうした具体的な PROG の活用例の共有が望まれる。

(文責 成瀬 尚志)

11. 実施代表者の連絡先

教務委員会委員長 塚元 和弘

e-mail: ktsuka@nagasaki-u.ac.jp

電 話: 内線 2003

12. 申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班

主査 寺川 美穂

e-mail:fd@ml.nagasaki-u.ac.jp 電話:内線2077